

## 博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	臨床心理学分野
学籍番号		院生氏名	山谷 佳子
通学キャンパス	東京赤坂キャンパス		
論文題目	がん罹患が若年成人がんサバイバーの恋愛や結婚に及ぼす影響		
審査結果(枠で囲む)	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">合格</span> <span>不合格</span> </div>		
<p>&lt;審査結果の要旨&gt;</p> <p>1. 主論文について</p> <p>1) 研究の概要：本研究は、20代から30代（YA世代：Young Adult）のがんサバイバーの恋愛や結婚への向き合い方に焦点を当て、がんを抱えながら恋愛をしていくことおよび結婚に対する意識という心理的体験を明らかにし、がん罹患が彼らの恋愛・結婚行動にどのような影響を及ぼすかを探ることを目的としている。研究の資料は、Web上のがん患者によるがん患者のためのインタビュー情報番組“がんノート”のインタビュー内容である。未婚の男女30名を対象としている。質的研究法を採用し、逐語録の読み込み、切片化とラベリング、概念の生成、カテゴリーの生成と概念図の作成、カテゴリーの統合、一部の当事者による確認作業と進めた。結果として、YA世代がんサバイバーにとって、がん罹患や後遺症による自己肯定感の低下はセルフスティグマにつながっていた。また、恋愛対象者に対するがん罹患や後遺症のカミングアウト(自己開示)は、アイデンティティの形成や重要他者との親密性を築くといった発達主題の達成に深く関わり合っていることがわかった。そして、セルフスティグマの軽減にカミングアウトが寄与すると考えられ、セルフスティグマとカミングアウトの側面からYA世代がんサバイバーの支援を考えていくことが、彼/彼女らが生きやすくなる社会づくりの一助となると考えられた。さらには、思春期からの教育現場での心理教育の必要性、患者体験のある者との交流を目指したピアグループの重要性、カミングアウトにおける医療福祉専門職の果たす役割についても示唆が得られた。</p> <p>2) (倫理的配慮を含む) 研究方法、論述、論文形式は適切であった。</p> <p>3) 本研究は、YA世代がんサバイバー自身の生の語りから、恋愛、性、結婚という人生の重要で切実な問題に対して分析を試みた新奇な研究である。その結果、彼/彼女らに対する支援の方向性の一端が明らかになり、心理臨床上の意義が大きいと考えられる。</p> <p>2. 審査過程について：審査会は1回開催された。以下の点が指摘された。①対象に厳密な意味でのadolescent世代が含まれておらず、対象および題目をAYA世代(Adolescence &amp; Young Adult)からYA世代に変更することが望ましい。②カテゴリーのいっそうの精選が必要。③概念の加筆を要す。④先行研究との比較検討の加筆を要す。その結果、それぞれについて適切に加筆修正がなされた。</p> <p>3. 口頭試問においては適切に応答した。</p> <p>4. 以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士(臨床心理学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	主査	飯長 喜一郎	
	副査	栗田 康生	
	副査	白井 明美	